コロナ禍における大正大学と
奄美大島（離島）との関わりと今後の展望

坂井　三智子

大正大学 地域構想研究所 奄美支局

2020年度、新型コロナウィルスが猛威を奮い、日本全土が混乱しました。

ここ奄美でも４月にコロナウィルスに感染者が確認され、島内はじめ、奄美群島が肝を冷やすこととなりました。奄美群島は、離島であること、そして高齢者が多いこと、病床数の不足など、懸念事項が数多くあり、島民みんなが緊張した日常を送った2020年となりました。

奄美は2017年２月より、世界自然遺産登録を目指しユネスコに推薦書を提出、同10月にＩＣＵＮの現地調査を受けましたが、2018年に登録延期を勧告され、同６月に推薦を取り下げられました。その後、ＩＣＵＮから指摘された希少種を捕食する外来種対策や推薦地域の飛び地解消などを進め、2019年２月に推薦書を再び提出し、同５月ごろに勧告が出される見通しでした。ですが、新型コロナの世界的な感染拡大を受け、世界遺産委員会が21年に延期となり、『世界自然遺産登録』までもがコロナウィルスに振り回されています。ですが、この延期期間で、島民の『世界自然遺産登録後の奄美』を考える時間をもらえたのではないかと思います。世界自然遺産登録後は、観光客が増加すると言われています。インバウンドも増える事が見込まれていますが、島民の受入体制が完全にできているとは言えません。2021年５月までに島民の意識をどこまで世界自然遺産登録に合わせることができるかが今後の目標なのかもしれないと考えます。

大正大学地域構想研究所奄美支局では、開催予定の「こども学」がやむなく中止となりました。昨年受講していた子どもたちや保護者から今年の開催の有無を聞かれるなど、地域に浸透してきていると感じていた講座であり、毎年、たくさんのこどもたちが楽しそうに受講している姿を見ていただけに、この中止の判断は苦渋の判断であり、かつ、先に述べた、『世界自然遺産登録後の奄美』をこどもたちと一緒に考える講義も考えていたので、とても残念でした。

奄美支局の活動でメインとなる『こども学』が中止になったことで、ほかに何ができるかを考えました。コロナ禍では『人を集めて講座を開く』などの活動ができないので、このコロナ禍でなかなか旅行に行けない人たちに、座・ガモールの商品で旅行気分を楽しんでいただこうと思いました。旅先でしか購入できないような商品を巣鴨の座・ガモール２号店・３号店から取り寄せ、奄美店に並べました。北は東北、南は九州、日本全国、大正大学が提携を結んでいる地域の商品が奄美店に届きました。食文化は地域で違う、ということがわかる品揃えでした。おかげさまでたくさんのお客様に喜んでいただきました。

今後もいろいろな商品を発注し、奄美店で日本全国いろんなところへ気分だけでも旅してもらえるようにしたいと思います。

更に、コロナ禍だからできること、リモートでできることが何かないかを考えました。

奄美は高校を卒業したら約８割の学生が進学・就職で島を離れます。

昨年、奄美を離れた学生たちは、誰も経験した事のない『コロナ禍の世界』に飛び込んでいったこと

になります。まったく知らない土地で、友達もなかなかできないまま不安な日々を過ごしたことでしょう。そして、いまだに不安な日々を過ごしている人もたくさんいるのではないかと思います。また、今年の高校３年生は来年度、そんな世界へ飛び込んでいくこととなります。学生はもちろんのこと、保護者もそんな中へこどもたちを送り出すことはとても不安だと思います。そんな不安を少しでも解消していただけたらと、今年度大正大学が開催したリモートでのオープンキャンパスを、なぜまちモーレでも放映することにしました。『人を集める』ことがなかなか難しい時期だったので、なぜまちモーレを利用してくれている高校生に声をかけました。『東京の今』を知ってもらえるように、大正大学の資料、東京の不動産情報などを送っていただき、配布いたしました。リモートオープンキャンパスでは、現代学生がどんな生活を送っているのかなど具体的な話も聞けて、とても参考になったという感想をもらいました。

今後も、大学の様子、東京の様子、東京での生活など、高校生や保護者から質問があった場合は、大正大学の職員や奄美実習に来ていた学生たちにも話を聞き、伝え、島を離れるこどもたちの不安を取り除き、明るく未来を見据えてもらえるようにサポートできたらと考えております。

また、日常的に、小学生が遊びに寄ってくれます。その際、こどもたちには当店の大きな窓ガラスに絵を描いてもらったり、折り紙をおったり、カードゲームをしたりしています。こどもたちが気軽に立ち寄ってくれることで、こどもたちの見守りもできます。０～１歳頃までの赤ちゃんが遊びやすいように、マットを敷き、授乳スペースも作ったことで、赤ちゃん連れのお母さんが立ち寄ってくれる事も多くなりました。居心地の良いスペースになるよう、日々模索しながらですが、地域の人々やこどもたちと『心を密に』接していけたらと考えております。